

パウル・ナトルプ「ペスタロッチの理想主義」

を讀む（承前）

長 田 新

六

ペスタロッチの教育説を祖述し發展し、且つ理由付けるに新カント哲學を以てすること、自己の教育學的課題の第一に數へたナトルプは、ペスタロッチの教育説がたゞ獨逸理想を主義哲學に基づくといふ一般的の證明に止まることを肯んぜず、すゝんで種々の點からペスタロッチをカントに比した。さて理想主義よりすれば實在は外界から與へられたものではなくて、認識的意識の特有な創造に依て意識となつたものである。レアリズムが意識を非實在と見るか、若しくは少なくとも全き實在と見ずして、意識されざる實在を却て眞の實在と見るに對し理想主義にあつては實在はそれが認識さるゝ限りに於て實在となるので、認識的實在意識的實在の外に實在

はない。これ實に理想主義の最後の意味でなくてはならぬ。そしてこの意味に於てペスタロッチを理想主義者に數へたものも、必ずしも彼をカント派に入れなんだ。エクハルト・ルーテル・ニコラウス・フォン・クース・ケブラー・ライブニッツさてはレッシング・ヘルデル・ゲーテ等幾百の獨逸の偉人をば、一人の例外なしに理想主義者に認めたその理由より直ちにこれをカント派に數へなかつたと同じ意味に於て、人はペスタロッチをカントに擬せなんだ。カントは獨逸精神を代表した第十八世紀の多くの偉人のたゞ一人に過ぎなんだのであるが、彼の眞理に對する愛と鋭き知的良心とは、自己の所有を學的嚴密に訴へ論理的證明を試みずには居られなんだ、ペスタロッチは之れに反して、自己の所有を敢て學的嚴密に訴へ論理的證明を試みんとはせなんだ。蓋し自ら他に其本職を有つた彼には、自己の所有の論理的證明そのものは特殊の意味と價值とを有たなんだ。たゞ當代の一般思潮であつた彼の理想主義に對する體驗の一點に於ては、ペスタロッチは明かにカントと同じ立場にあつた。チーグラに依れば人間には「ゲーテ型」と「カント型」といふ全く違つた二つの型があり、ペスタロッチは明かにゲーテ型であつてカント型ではない。すなはちペスタロッチにあつてはゲーテと同様哲學はその内職で本職は自ら他にあつたといふのである。ナトルブに依れ

はペスタロッチがゲーテ型かカント型かは問ふところでない。語を換ふればペスタロッチはチーグラの觀てをるやうにゲーテ型の人間であらう。けれど問題はたゞ人間の本质従つてまた人間教化に關するペスタロッチの根本思想如何といふことで、この點に立つてナトルブは飽くまでペスタロッチをカントに擬し、兩者ともに獨逸理想主義より人間の本质とそして人間教化の理想とを定めたといふのである。

ペスタロッチとカントとの比較に於て、兩者ともに人間の本质を一種二元的に觀じをることは恐らく何人も否み難い事實であらう。兩者は人間の本质に感性与道德性と、従つてまた感性的制約と道德的自由との對立を認めた。ナトルブに依ればペスタロッチとカントとが人間の本质をかく二元的に觀たのは、そも／＼この兩者の思想がその根を深く宗教におろしてをるといふ共通の源から來る現はれである。けれど兩者の二元的見解は感性与道德性、制約と自由、自然と精神との單なる二元的對立でない。人はその認識に依てこの對立を征服し超越し一つにせんとして斷えざる向上的努力を續け、自己の課題を永遠に新たにしかくて、人らしく生きる」のである。感性的制約を受くる意に於て不自由なる人は、如何なる制約に依ても無制約的に制約せられざる意に於て自由である。ペスタロッチは、境遇は人を作るが、然かし人はま

た境遇を作る」と云つてをる。人が境遇を作るとは感性的制約を征服して精神的自由を一步々々と創造してゆくといふ意である。けれど絶對の自由は常に永遠の未來無限の遠方に殘され、従つてたゞその方向をのみ示し得るものとせば、かゝる自由は經驗といふ立場より見れば科學的のものでなく嚴密なるカントの批判的若しくは先驗的意味のもので、すなはち經驗ではなくて可能なる經驗の條件である。

ペスタロッチはもとよりカントの意味に於ける嚴密なる先驗的根據付けは心得な
 んだ。けれどその倫理上の理想主義更には理論上の理想主義に對する彼れの根據
 付けは、彼が深き思索に訴へ且つ又論理的といはんより寧ろ「本能的」に到達した體驗
 に依て試みられた。即ちペスタロッチはナトルプの明言してをるやうに「カントを眞
 似ることなしにカントと同じ道を歩み、且つカントの到達したその同一地點に達し
 た」のである。そしてこのことは先きにも述べたやうに、曾てフィヒテが指摘してペ
 スタロッチをして且つ驚き且つ悦ばしめたこと云はれてをる。あなたの思想は本質上カ
 ント哲學の結果に著しく接近してをる」といふ簡單な一節の挿話からも察し得られる
 であらう。つまりナトルプの反覆するところを極く端的に摘めば、論理的に發展す
 ると否とは別として、ペスタロッチとカントとは同じ道を歩み同じ地點に達したので

內的、所有そのものに差違なしといふのである。この內的、所有こそ、エクハルトとル
ーテルとに於ては獨逸的信仰として表れ、ニコラウスフォンクニスとケブラーとを
してライブニッツとに於ては一般獨逸思想として表はれるので、此等のいはゞ半無意
識的であつた思想をば、カント出で、コペルニカスの大業を成し、遂げ學的嚴密に訴
へて論證したのである。この同じ思想の泉を酌んで直接人間教化の土壤に灌いだ
のがペスタロッチである。ペスタロッチは思想の分析を必ずしも無用のものとして拒
みはせなんだが、彼の性格は分析的方面に發展し得ずして綜合的方面に走つた。け
れど人若しペスタロッチの「綜合」を照らし見るにカントの「分析」を以てせば、恐らくは兩
者の餘りによく一致せる事實に驚くであらう。幾百年の久しきに互つて同じ民族
の培つた哲學的の世界に於て同じ内觀的な新敎の雰圍氣中に於て、また彼の同じ啓
蒙思潮の流の下に育つたといふ意味に於て、假令思想發展の態度様式に綜合的と分
析的との差こそあれ、ペスタロッチとカントとが思想の内容をそれ自身に於て相一致し
居るべきはこの見易い道理である。

ナトルプはかくペスタロッチの教育説が獨逸の理想主義更にはカントの思想にさへ擬すべきものあるを力説し、すゝんでペスタロッチ教育説の核子を取り出し理由付けるに理想主義的認識概念を以てした。さてペスタロッチ教育説の最高原理は「自然に従ふ」といふことであるが、この最高原理は「自發性」「方法」及び「直觀」の三原理を根本要素とする。この三原理のうち自發性は自己活動または自己生産の源で一切認識の可能が一般に依屬する、最後の中心點をなす。故にまた意識の根源認識の永久の發祥地點としての自我である。かゝる一切認識の根源としての自發性に比すれば「方法」はたゞその根源より來る法則に従つて動く立場に立つ。従つてこは認識主體としての自我より來る認識産出作用の法則である。蓋し生産的自我の作用は方法的或は合法的なる認識生産のはたらきで、このことは特に數または形といふが如き數學的認識に於て明かに證明されるであらう。之に反して「直觀」は認識一般の根源または認識を發展せしむる合法性といふが如き抽象的の原理でなく、實に自己活動の直接性に於ける眞の具象化の原理である。吾々の認識が眞の具象性を得るために

は、それは必ず直観に依らねばならぬ。直観に依て一々の認識は全き個性を賦與され最高の行動性を具備する。これ所謂觀念の「行動化」[Zur That werden]であつて、ペスタロッチはフイヒテより借ることなしに既に久しき以前より Thathandlung といふ言葉さへ使用して居る。直観に依て一々の認識が具象化し現實化するといふ意味に於て、直観は認識過程の結了を意味する。ペスタロッチに於て吾々が屢々遭遇するところの彼の結了の法則 Gesetz der Vollendung なる語は直観の根本標幟たる認識の具象化現實化に對する一つの新なる表現に外ならない。

かく考へ來ると「自然に従ふ」といふ最高原理の組織内容たる「自發性」「方法」及び「直観」の三者の同格的でないことが判る。蓋しペスタロッチにあつて眞の認識教化の原理は直観であつて、方法と方法の基礎としての自發性とは、これを直観に比すれば論理上の先行者で、いはゞ原始的な構成要素として直観のうちに働らくのである。然るに直観は上にも述べたやうに認識一般の具象化作用で、これを外にしては自發性も方法も共に單なるポテンツに終る。自發性と方法を比較すれば後者は作用の單なるフォーヘアを示すに止まらずしてそのウイとフォヒンとを示す意味に於て、前者より一層具象的の原理である。けれど此等の比較は認識生産の過程に於ける具

象性如何の考察で、從て自發性方法及び直觀の三原理中何れが論理上の第一であり認識生産過程の決定的原理かと云へば、そはいふまでもなく一切認識の根源たる自發性でなくてはならぬ。「我のあるところの總て、我の意志するところの總て、我のねばならぬところの總ては我自からより發する。我の認識も亦我自からより發してはならぬか」とペスタロッチは云つた。この我自からは勿論カントの先驗統覺の純粹自我ではなくて具象的なる自我である。けれど均しく一切活動の中心點としての自我であり、從てまた一切認識の發祥地點としての自我たることは明かである。

八

直接教化の原理としての自發性方法及び直觀の意味を明かにしたナトルプは、均しくペスタロッチ教育說の中核をなす「精神能力の調和」及び「社會」の二大原理が、何れより來りまた如何にして自發性方法及び直觀の諸原理と相關係するかをすゝんで明かにせんとした。ペスタロッチは先づ人間の認識に方向 *Richtung* があることを認め、具體的に道徳的精神的及び身體的の三大方向を數へたのであるが、この三大方向は夫れ々意志と思惟と行動とに相對應する。吾々の直觀的要求のうへに横はる意識の

連續性の延長は必然的に教化内容としてのこの意志思惟行動の調和的發展を要求するのであるが、さてこの意志思惟行動の三者は同時に人間本質の全分野を包括せるものである。而かも教化内容としてのこの意志思惟行動の三者は前に述べたる自發性方法直觀の三原理に夫れ々の相對應する。蓋し意志は自發性より發し來り而かも「我の意志するものは未だ存せざる」の意味に於て自我の一種潜在狀態である。次ぎに思惟は方法に應ずる。蓋し方法は純粹悟性の過程なるがゆえである。然るに意志と思惟とは最も直接的なる行動に至つて始めて具體的に統一し、こゝに認識過程は結了するのであるが、さてこの認識過程を結了せしめんとして意志や思惟に具體的統一を與へるのが直觀である。ゆゑにペスタロッチにあつて直觀は全く行動的性質を有する。従つてそれはまた單なる受動的作用でなくて、能動的な自我より發し來る動作いはゞ「認識の動作 [Tat der Erkenntnis]」でなくてはならぬ。かくて吾々はペスタロッチ教育説に於ける「行動に依る認識教化」の眞意義を明かに理解することが出来る。行動に訴ふることに依て總ての認識は眞の生命を得る。行動は根柢あり生命ある認識方法としての直觀である。

既に人間教化の内容が意志と思惟と行動との三者であり且つ「社會」がこの三者の

最も密接に關係せる具體的存在たる以上、人間教化は社會に於て始めて具體的に最後の目的を達し得らるといふペスタロッチの立場も自から明かではないか。發展されてナトルプの社會的教育學を組織したとさへ云はれ得る彼の「生活が陶冶す。Das Leben bildet.」といふペスタロッチの教育原理は意志と思惟と行動との教化は、意志と思惟と行動とが密接に關係し且つ具體化する社會に生活することに依て成し就げらるといふ意である。社會に於て人間教育が成し就げらるといふ以上、次いで起る問題はペスタロッチ教育說に於ける個性と社會との關係如何といふことである。ナトルプに依れば完全にまた具體的に觀念されたる個性は最初より社會的關係を含み社會はまた具體的には個人に於てのみ存立する。自我は道德的に精神的にまた物的に常に或る中心點に位すること云ふまでもない。けれど凡そ對立點なき中心點の考へられざる以上、而してこの對立點が自我に對する對立點なる以上、それは因ではなくてDuでなくてはならぬ。我とは汝あつての我である。而かもこの汝たるや一個の汝 Ein Duでなく若干の汝でなく、ペスタロッチの直觀に於ける生命のうちに横はる彼の連續性の法則より汝の總體 Allgemeitでなくてはならぬ。この總體たるや人類と一致し父なる神の下に於ける同胞の社會と一致しなくてはならぬ。而かもこの

神たるやペスタロッチに於て我の外にあるのでなく我の内部的關係に外ならぬ。グーテの「神的」の詩に最も強く影響されたと云はれてをるペスタロッチの宗教觀に於て神は我の本性のうちなる「よりよき力」詳しく云へば肉を支配して我の全體を高め行くところの「よりよき力」の外に神はない。神はかく我の内部關係たると同時に全體を統一するその統一者である。我の生命は生きたる意識であるが、生きたる意識は生命が連續を意味するところより總體の意識であり従て總體の統一である。かくて生きたる意識に取つて神は最も近き内的關係を有つ。いな一つの意識一つの生命が自我であり總體であり神である。ペスタロッチ教育說に於ける社會の原理が個性を如何に見るかの問題は、斯して意識または神に就ての彼の思想より自から解せられるのである。ペスタロッチ教育說に於ける「社會」の原理をかく觀來つたナトルプは、斯の如きを假りに人間及び人間教化に關するペスタロッチ哲學の最後の意味とするならば、ペスタロッチの教育說は一切を我の内部に求めんとする獨逸理想主義をアルファとシオメガとするものであると云ひ、「獨逸的精神と獨逸的心情とを根本精神とする教育者は、プラトーンまで溯らなければペスタロッチの外にはない」とさへ斷言した。蓋しペスタロッチの天才を俟ちて獨逸的精神獨逸的心情はその根本の深味か

ら逆り來つて理想主義の教育説を結晶したのである。私はなほ最後にペスタロッチ教育説の最高原理であるとさきにも一言した「自然に従ふ」の觀念を明かにして、ペスタロッチ教育説が如何に獨逸理想主義哲學に立脚するかを明かにしやう。

九

自然を重んずるペスタロッチの思想がもとルッソーに相傳しをることは、ペスタロッチの處女作であり且つその後の凡ての彼の著作に影響したと云はれを彼の「隱者の夕暮」に於て明かに辿り得る。尤も自然に就ての彼の思想は彼の生涯とともに變化し、スタンツやブルグドルフに於ける新經驗は初めルッソーに承けた自然の思想に著しく變化を與へたことは、彼が當時悟性または道德の教養に對して何等か確實なる根據を求めをる事實に依つても明かであるが、さてペスタロッチの「自然に従ふ」とはそもく何か。教育の出發點としての自然とは何を意味するか。ナトルプに依ればペスタロッチの自然はルッソーの自然より出で、而かもルッソーの自然を超越してをりそこにペスタロッチの偉大がある。蓋し若し彼の自然が、前社會的Vorgesellschaftlichな自然であり、従つて前理性的な前道德的な自然であるならば、それはルッソーの自然と選ぶ

ところがない。ペスタロッチが假りに此處に止まつたとすればその教育説は結局他律 Heteronomie に陥る。けれどペスタロッチに依れば人はその最内部に於て自ら變化し且つ最初の自己の衝動と戰つてゆく。この變化と戰とが人間の自然を立法者たらしむる所以である。ペスタロッチは「隱者の夕暮」に於て既に明かに内部なる人間自然の性は單なる衝動性ではなくて道德性を内在せしむと見てをる。人が自ら意志し自ら立法者たり得るは、人の自然の性もどかゝる道德性を内蔵するゆえである。ペスタロッチ自ら「人間の最内部には必然と義務とに對する永遠の革命が暴れる」と云つてをるが、彼の思想は他律でなくて自律である。戰ひつゝ感性的生活を道德的生活へ發展せしめゆく人性内部の可能性を前提として教育が成立し、且つ「人類發展に於ける自然の行路」が纏てまた人類教育の行路ともなるのである。

人はその内部の性に従つて自己の完成に力めるのであるが、さてこの力は純粹善に對する無限的または超限的な意志で、永遠に達することの出来ない點に向つてをる。人が自由であるとは無限的超限的純粹善に向はんとする可能性あるの意味に於てある。かゝる自由はイデーとしてのみの自由であると云ふ事も出來やう。實に人は「ねばならぬ」ものゝイデーに於て一切中の最高存在であり。内的本質に従

つて最高存在である。人はかくその本質より無限的目的に向ふのであるが、さてこの無限的目的こそ人が人にまで發展する道行であり従つてまた人の教育を決定する條件でなくてはならぬ。徳性の完成は吾等の眼前無限の遠方に廣がる。従つて完成のための努力も無限であり、この努力の無限のうちには人はその最も眞實なまた最も人間的な生活を生きる。單なる感性的存在たるか若しくは單なる精神的存在たるかに依て人は常に平和であらう。人はこの兩者の何れにもあらずして而かも同時にこの兩者である。即ち人は、感性的、精神的存在なる事に依て永遠の努力をする。ペスタロッチの見たる人間は動物にあらず神にあらずして、努力に依て動物より神に化成しゆくところの兩面的或物で、ナトルプがこれをフューストに擬したのは當つてをる。ペスタロッチの人間は永遠の向上的努力に生きる人間で、自から永遠化し自己に於ける有限の永遠の努力従つて不滅を保證する人間である。

ペスタロッチの人間をかく發展し來つたナトルプは、人間に對するペスタロッチの見方をプラトンのそれに比して次の如く論じた。すなはちプラトりに於けるエロスは滅びんとするものゝ不滅を意味するところの永遠の自己再生の衝動である。エロスは亡滅的でもなければ不滅的でもなく、この兩面の同時的或物である。蓋しエ

ロスは永遠の死従つて自己を永遠ならしめ不滅ならしむるものでなくてはならぬ。ペスタロッチの思想は中核に於てプラトニーに一致する。ペスタロッチとプラトニーとは同じ立場に立つて人間を従つて人間教育を觀た。苟くも「隱者の夕暮」ゲルトルードとリーンハルト「白鳥の歌等を貫き流るる」ペスタロッチの教育思想を「理想國」に表はれたるプラトニーの教育思想と比較するものは、兩者の如何に一致せるかに驚くであらう。ペスタロッチ自らの語に曰く「汝（人間）のみよく不死である、汝は汝自らの永久性の創造者なればなり」と。人間は永久の業の創造者である。彼はあらゆる場合滅びゆくものに永久の連續を與へる。人間が永遠たり得るは自然の性のうちなる「聖ゆえ」である。人間はこの「聖ゆえ」に自己自身に於て不滅である。ペスタロッチにありて教育はたゞこの自己自身に於ける不滅の上にのみ成立する。かくて人間教育は「*sich selbst zu sich selbst*」に基礎を有つ。従つて教育は自然の道行を以て人を教化することとなる。

「自然に従ふ」ことを最高原理と見たペスタロッチ教育説に於ける自然の觀念をかくナトルプが發表し來つたのは、つまり彼がペスタロッチの自然はルッソーの自然を承けて而かもこれを超越したといふことの證明にあつたとも云ひ得やう。ペスタロッチ

の自然が上に見たやうに自律的な自然であり永遠の自己更生の力を宿す自然とするならば、而してかゝる「自然に従ふ」ことがペスタロッチ教育説の最高原理であるとするならば、この最高原理は自己活動を重んずるといふ彼れの直接教化の原理と内面關係あることが察せらる。蓋し人間がそれ自身自己の永久性の創造者であるといふことは、必然的に自己活動の原理を裏書きすると同時にまた自然の性を重んずべしとの原理をも裏書きする。自然の性が既に自己自身に於て自己を永久化し行く可能性であるからである。プラト、エクハルト、ライブニッツ、ゲーテ、シラー皆この立場に立ち、カントは自發性と自由とに於て、フイヒテはまたそれ等の内的統一を一切の根柢として、何れも人間を不斷の自己再生者と觀念した。ペスタロッチの教育哲學がその根を深く獨逸理想主義におろしてをるとは、或は自然を重んじ或は自己活動を重んずる彼の眞意が、畢竟總ての滅び行くものに永遠の生命を賦與せんとする自我の創造性を核子とするにあるといふことである。ペスタロッチが幾百回となく繰返しをる「自然及び本質」の語は、決して淺薄に解し去るものでないとナトルプは注意する。自然に従ふことを最高原理と觀たペスタロッチの教育説を、誰かまた世に謂ふ「自然主義」と同一視するものぞ。

+

ペスタロッチの教育説を以て獨逸理想主義に立つ教育説に外ならずと斷言し、更にはペスタロッチの思想をカントのそれにさへ擬する勇氣を幾度か示したナトルプは、數多いペスタロッチ研究者の中より彼と同じき道を歩まんとした唯二人を誘ひ來つて味方とした。唯二人とは一九一〇年「ペスタロッチ Pestalozzi」を公けにしたホイバウム Heubaum 及び一九一四年「ペスタロッチ教育説綱要 Grundlinien der Erziehungslehre Pestalozzis」を公けにしたウイゲット Wiget とである。ナトルプは先づホイバウムの研究がペスタロッチを照らすにカントを以てせることに同感し、「余はホイバウムを根本に於て同じ理解に立つ」と云ひ、且つ人間の自由に就てのペスタロッチの思想が「カント、フイヒテ、シライ、シュライエルマッヘル、略言すれば先驗的理想主義の主なる代表者と同一列に入る」といふホイバウムの解釋は、偶々以てホイバウムの根本的立場がナトルプ自身のそれに相一致することを證明する確實な資料であると彼は云つてをる。

ナトルプは次いでウイゲットのペスタロッチ研究に多大の賛意を表はした。ペスタロッチ教育説の哲學的基礎の研究といふ點より見て、ウイゲットの研究がナトルプの研

究と密接な關係あることはナトルプ自身言明するところであるが、さてナトルプがウイゲットに賛意を表した理由は何か。ウイゲットは先づペスタロッチがその教育説の根本條件の理由付けに於て正しくその目的を達し居ることを認め、すゝんでその根本條件がカント哲學に擬すべき物に立脚することを力説した。然らばウイゲットが看て以てペスタロッチ教育説の根本條件とせるものは何か。そは經驗的か先見的か、因果的か目的的か。ウイゲットに依ればペスタロッチ教育説の根本的條件はこの兩者を含んだ。蓋し人間教育の方法に關するペスタロッチの理論は、飽くまでも因果的必然と精神現象の自然法とに立脚する。學習過程としての觀察實驗歸納に關する心理的原理である。この心理的原理に對してウイゲットがことさら高唱したのはペスタロッチ教育説に於ける倫理的原理である。倫理的原理に於てペスタロッチは明かにカントの道を歩み、單なる合法性に對して道德性を、他律性に對して自律性を、因果的決定的必然性に對して自由を主張した。而かも、倫理的立場と心理的立場との峻別を以て。ペスタロッチ教育説に對するウイゲットの以上の解釋が、ペスタロッチ教育説の新カント的再建を目的としたナトルプの殆ど無條件的承認を得たことは察するに難くない。

十一

さてこのナトルプの近業「ベスタロッチの理想主義」はさきにも述べおいたやうに、ベスタロッチ教育説の祖述と發展とを其教育學的課題の第一としたナトルプに於て、ベスタロッチ研究の「完全な圓熟した理解」であり、且つ「ベスタロッチの業績の最後の意味の明かになつた」ものである。私が特に此書を價値付ける理由の一つはその思想が「いはゞ生活の流と共に轉々し、經驗より直接迸り出でたる思想の豊富と潑瀾とは、竟にシステムといふ桎梏を拒んだ」とさへ云はれた紛雜極まるベスタロッチの思想をば、よく或る中心點に立つて征服し綜合し統一したところにある。ベスタロッチを全體として捕へ而かもその生命の琴糸と同感しをる點に於て史上ナトルプに比すべきものは他にあるまい。教育史上文献の多きことベスタロッチ研究に及ぶものなしと云はるゝその文献中、叙述の詳しきものは多くモザイクに終つて發展的生命の生動を缺き、確實なりと云はるゝ多くは眼界一局部に限られ、加ふるに往々對象を我が用に供せんとする功利的態度に墮す。かゝる局部的な利用的ないはゞ自然科學的態度を脱して、統一的全體發展的生命を捕へ、且つこの統一的全體發展的生命に同情同感

し、讚美の極屢々無關心の境に入るナトルプのベスタロッチ研究は、嚴密なる意に於ける哲學的態度に加ふるに更らに藝術的態度と宗教的態度とを以てすとも云ひ得やう。若し夫れナトルプがベスタロッチを發展し、理由付けるに獨逸理想主義更らにはカント哲學を以てせるところ一種附會の嫌がないでもない。けれど、苟くもベスタロッチの統一的全體發展的生命の「新」に面接せんとする絶對的見方を眞の研究的態度なりと許容し得るものは、カント哲學にまで突入せるナトルプのベスタロッチ研究を以て却て眞の研究を云はざるを得まい。

十二

ナトルプが此の研究を公けにした理由はさきにも云つたやうに一九〇九年に著した「ベスタロッチ、彼の生涯とその思想」に於て、ベスタロッチ研究のことはむしろ今後のごとに屬すと云つたその約束の履行とも見られ得るのであるが、いまこの一篇の筆を擱くに方つて尙ほ附け加ふべき他の一つの理由は、彼がこの一書を滅びんとする彼の祖國のせめて再生のよすがにもと思つた一片の愛國の至情である。「ナポレオンの國難から普魯西と獨逸とを再興せしめた歴史は、當時ベスタロッチの名前が吾

が民族に取つて何を意味したるかを忘れるわけにゆくまい」と云つて過去のペスタロッチに感謝したナトルプは、筆を轉じて「既に平和回復の今日、吾等は教育問題全民族の精神的再生に目覺めねばならぬ。焦眉の急を告ぐるこの秋に方つて、獨逸民族のこの眞實の教育者が吾等に果して何物を贈つたか。其贈物に依て吾等が如何なる義務を負ひをるかを理解せねばならぬ」と云ふ。「唯物主義と帝國主義との相まつはるところ竟に今日の悲運を招いた」と彼のブートルをして評せしめた獨逸をして、再び人道的愛の教育者ペスタロッチに學ばしめんとしたのであらう。昔はフィヒテ出で、獨逸國民に告ぐるにペスタロッチの「新教育」を以てし今はナトルプ出で、ペスタロッチの理想主義を高唱す。フィヒテに依て覺めた獨逸民族は、恐らくナトルプに依てまた覺めるであらう。(一九二二年二月五日)